

完全禁煙社会の飲食ビジネス

煙に巻いてはられない!?

禁煙がブームになって、ずいぶん長い時間が経ちました。
 みなさんの周りを見渡してみても、
 ここ数年でタバコをやめた方が少なくないはずです。
 さらにそうした流れを加速させるかのように、
 社会の喫煙環境も激的に変わりました。
 公共の場所での禁煙は今や常識ですが、
 健康増進法が施行（平成15年5月）されたことによって、
 飲食店における喫煙も、
 今までのように「お客さまの自由」とはいかなくなっています。
 完全禁煙社会に向けて動き出した日本。
 さて、飲食ビジネスにおける紫煙の行方は....



禁煙いろいろ。 「健康増進法」施行で 変わり始めた飲食ビジネス

会社では狭い喫煙スペースに追いやられ、街に出れば条例で歩きタバコ禁止。さらに、家に帰ればベランダでのホテル族...。喫煙者にとっては、全く肩身の狭い世の中になりました。「せめて、飲食店ぐらいは自由にタバコを吸わせてよ...」、という嘆きも聞こえてきそうですが、残念ながら、喫煙者の最後の砦にも、禁煙の波は確実に押し寄せているようです。

「タバコは吸われますか？」
 今、レストランの入口などで、喫煙の有無を聞かれることが珍しいことではなくなっています。これは、「多数の方が利用する施設（飲食店も）について、受動喫煙を防止する措置を講ずるよう努めなければならない」とした、健康増進法が施行されたため。

もちろん、健康増進法がつくられる以前から、禁煙ブームや嫌煙者に配慮するかたちで、禁煙席を設ける飲食店は少なくありませんでした。しかし、この健康増進法によって、タバコの好き嫌いといったレベルではなく、健康を害する“受動喫煙の防止が義務”となったために、多くの店が喫煙上の運営（完全禁煙か、分煙か、など）を見直さざるを得なくなったのです。

現在の飲食店の禁煙環境をリサーチしてみると、やはり、終日完全禁煙という店はまだまだ少数。完全禁煙で有名なコーヒーチェーンなどの例もありますが、一般の喫茶店においては、やはり“コーヒーとタバコ”の結びつきが断ちがたいのか、全く禁煙席を設けていない店舗が多いようです。

レストラン形態の店においては、禁煙席




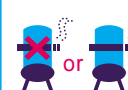

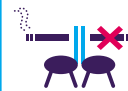

日本のカフェで室内を完全禁煙にした世界最大のカフェチェーン。その衝撃は大きかった

と喫煙席を分けた分煙と、ランチタイムの間だけを禁煙にするといった、時間帯禁煙などの措置をとっている店が多いようです。ただし、どちらも受動喫煙を防ぐという意味ではその効果は不完全。ファミリーレストランチェーンなど、多くの店が採用している分煙スタイルは、本来、空港などに見られるように、排煙装置を完備して、喫煙の影響が全く及ばない禁煙スペースが必要になるわけですが、実際にはキッチンとそれを行っている店はごく少数。喫煙席と禁煙席が背中合わせなどという、いわば不完全分煙の店が多いのが実情なのです。



ファミリーレストランの多くは分煙されているが、写真の店舗のようにある程度ガラスや壁で仕切られている店は良いほう。まだまだ、仕切られていない店舗が多い

飲食店の禁煙環境のタイプ

-  **完全禁煙**
（営業時間内全て禁煙）
-  **完全分煙**
（喫煙の影響がないように、禁煙席と喫煙席が完全に分けられている）
-  **時間帯完全禁煙**
（ランチタイム完全禁煙など）
-  **不完全分煙**
（禁煙席はあるが、喫煙の影響を受ける可能性がある）
-  **禁煙席なし**



羽田空港第2ターミナル内のカフェでは、時間帯による分煙が行われている



飲食施設禁煙は世界標準!? テラスまで 完全禁煙のレストラン

「完全分煙というのは、飲食施設において、実は一番難しいことなんです。禁煙席といったって、よほどキッチンと喫煙スペースを隔離して作らない限り、煙は流れていってしまいます。健康増進法に則った形で飲食スペースを運営するためには、やはり、完全禁煙という選択しかありませんでした」

JICA(独立行政法人国際協力機構)横浜広報担当の萩原氏はこう語ります。

横浜のみなとみらい地区にあるJICA横浜のレストランは、世界各国から受け入れられている研修員のためにJICAが運営する飲食施設。

一般にも開放され、横浜の人気観光スポットである赤レンガパークや港の景色が楽しめる、知る人ぞ知る穴場スポットです。

さらに、このレストランは、テラス席を含む飲食スペースの全てを禁煙にしているという徹底した姿勢で、嫌煙派の人々からも高い支持を得ているのです。通常、完全禁煙といっても屋内のみで、オープンエアのテラス席では喫煙可という店が多い中、テラスまで禁煙にしてしまうのは稀有なケースといえるでしょう。

「実は、このレストランもオープン当初



(JICA)

の1ヶ月弱の間、店の片隅に排煙装置を設置した喫煙スペースがありました。外国人の方でも、結構喫煙なさる方はいらっしゃいますので…。でも、やはり煙を完全にシャットアウトすることはできませんし、パブリックスペースでの禁煙は、世界の常識ということも考えて、すぐにテラスも含めた完全禁煙にしました。お客さまも、喫煙の問題で文句を言われる方はいませんし、皆さん納得していただけていますね」(萩原氏)

日本のみならず、禁煙は世界的な流れ。嗜好も習慣も違う人々が集まるスペースだからこそ、世界標準の完全禁煙という、飲食空間の提供がもっとも好ましかったでしょう。

JICA(独立行政法人国際協力機構)…日本のODAのうち、二国間贈与にあたる技術協力、無償資金協力の一部を実施する組織。開発途上国からの技術研修員の受け入れ、海外移住者や日系人社会への支援、海外ボランティア事業(青年海外協力隊、シニアボランティア)など、人と人、国と国を結びつける国際協力を推進している。

JICA横浜レストラン

JICAの運営するレストランのため、広告宣伝活動は行っていないにもかかわらず、赤レンガパークを望む絶好のロケーションと、世界各国から訪れる研修員を考慮したフードのバリエーションでも人気の穴場のレストラン。

横浜市中区新港2丁目3番1号

045(663)3251(代)

営…モーニング/平日7:00~9:00

ランチ/11:30~14:00(LO.13:30)

喫茶(ドリンクのみ)/14:00~17:00

ディナー/17:30~21:00(LO.20:30)

休…不定休

加速化する完全禁煙社会。 喫煙店が 淘汰される時代が...

飲食店を経営する、ビジネスの立場からこのタバコの問題を考えると、店に禁煙を導入することには、幾つかのメリット、デメリットが考えられます。例えば、店を完全禁煙にする場合は、その趣旨を伝えるサインを一つ作れば、現状にほとんど手を加えることなく、店を維持することが可能。また、喫煙による店内の汚れや、灰皿などの処理、客の回転(滞留時間の短縮)などを考えれば、経済面、効率面でのメリットは少なくないでしょう。

しかし、完全禁煙にすることで、予想されるデメリットももちろんあります。一番は、喫煙者の客足が遠のいてしまうかも…、ということでしょう。店を効率よく運営できても、客が来ないのでは元も子もありません。実際に、長崎ちゃんぽんのチェーン店「リンガーハット」は、2002年11月に全店完全禁煙に踏み切ったものの、2004年4月には業績の悪化を理由に時間帯完全禁煙へと方向転換しています。

また、海外に目を向けても、罰金(店の経営者に最高2,200ユーロ 約30万円 喫煙した客に最高275ユーロ 約37,000円)や営業停止措置を含む、厳しい「禁煙法」が施行されたイタリアでは、レストランやバル(軽食・喫茶店)の店主が反発の声を上げています。それも、もちろん喫煙者の客足が店から遠のくことを危惧してのことです。(さらに、この法律では、喫煙した客がいた場合、店側が警察に通報する義務もある)

日本の健康増進法には、今のところ諸外国のような罰則はなく、タバコと縁の深い、酒を提供する居酒屋やバーなどでは、未だ分煙すら行なわれていないのが現状です。しかし、罰則がないからと安心してばかりはいられない“事件”が、日本でも起きました。

今年1月、大相撲(両国国技館)が場内の完全禁煙をスタートさせ話題となりましたが、その歴史的な転換のきっかけになったのが、「升席で受動喫煙の害にさらされた」として、日本相撲協会が訴えられたこ

とでした。訴訟社会アメリカでは、喫煙によってガンになったタバコ会社を訴え勝訴した人がいましたが、日本においても、飲食店が訴えられるということも十分に起こりうることでしょう。そうなったら、「完全禁煙にすると客足が…」なんてことは言っていないでしょう。

イギリスでは、大手パブチェーンが国内のパブ650店を全て禁煙にする(2006年5月から)と発表していますが、その理由は、「タバコを吸わない人が増え、煙いからという理由で多くの人がパブに来なくなっている」というものでした。

先進諸国がそうであるように、日本における完全禁煙社会化がさらに進むことで、喫煙人口(飲食店で喫煙をしたいと望む)が減り、完全禁煙のデメリットはなくなっていくでしょうし、逆に、喫煙を許す店ということが、非喫煙者から敬遠されるという、逆転現象が顕著になるかもしれません。



年間千人が人の煙で死んでいく... 受動喫煙の恐ろしさ

タバコが体に悪いことは、小学生でも知っている事実。でも、意外に知られていないのが、健康増進法にも盛り込まれた、受動喫煙の恐ろしさです。喫煙者の中には、「自分が害を承知で吸っているんだから、誰にも迷惑をかけてない。喫煙する権利がある!」と主張する人もいますが、実は、タバコの害はそんなに単純ではないのです。なぜなら、タバコは自分で吸う主流煙(フィルターを通して喫煙者の体内に吸収される煙)よりも、副流煙(タバコの先から昇ってくる煙)により多くの有害物質(発がん性)が含まれているからです。ある調べによれば、受動喫煙が原因で年間千人以上もの人が命を失っているのだとか。自分ではタバコを吸わないのに、他人が吸ったタバコの煙に健康を害されてしまうなんて、こんなに理不尽なことはありませんよね。



日本発のカフェチェーン店では、「コーヒーとタバコ」の伝統を受継いでいるせいか、禁煙席は圧倒的に少ない

